



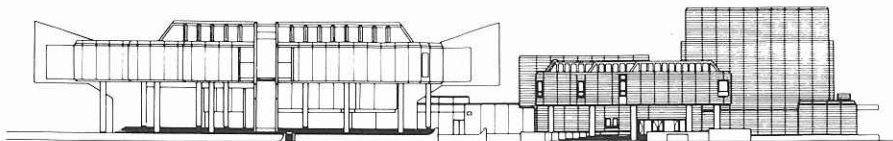
金銀平文琴 (正倉院古楽器模造美術品) 部分 東京国立博物館

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

5 January 1994

No. 104



展覧会案内

時代をかなでた楽器 音の結ぶ世界

古代から現代までを、その各時代を象徴する音楽(楽器)、つまり時代をかなでた楽器を通してとらえ、時代の変遷によって人と音の結び付きはどのような変化を遂げてきたかを探る。

展示構成は、I 和楽の源流、II 雅楽の世界、III 能の世界、IV 庶民の息吹—浮立—、V 世界の楽器—日本の楽器その源流と交流—の5部門からなる。

I 和楽の源流

縄文時代から古墳時代までを中心に扱う。この時代は、原始期における日本固有の音楽が展開された時期で、次代へつながる様々な可能性を秘めた楽器たちの宝庫でもあった。

狩猟・漁撈・採集を中心にした生活から稲作・農耕文化と金属器の時代へ、そして強大な権力を持つ支配者の時代へと移行していく時代背景の中で、いったいどの様な楽器が何の目的で製作され使用されたのか、そして楽器の形態はどう変化していったのかを探る。

II 雅楽の世界

[雅楽の源流—和様化された雅楽—琴楽と清楽] 奈良時代から平安時代までを中心に、宮廷貴族の雅やかな音楽・雅楽を扱う。この時代は、大陸音楽が渡来した時代であり、さらにこれを日本風に改造し、あるいは排除しながら我国の雅楽に変化せしめた大陸音楽消化時代でもあった。この変化は、何よりもそこに使用された楽器の変遷として現れた。

大陸からの楽器の受容、そして選択・改造、この過程の中に日本民族文化の性質を探れようである。

III 能の世界

鎌倉時代から江戸時代まで、公家の雅楽に対して武家の芸能としての能が大成された時代である。

奈良朝の日本に唐楽(唐代の音楽)が輸入され、これが日本の雅楽として展開していく一方、散楽という古代中国の世俗楽も同時期に輸入され、猿楽となり、これが特に室町時代以降、観阿弥・世阿弥父子の手によって能楽として発展していく。

このコーナーでは、日本独特の創作性を持つ能面を、あえて音を感じる対象としてとらえ、囃子方の楽器を同時に展示することで、幽玄なる能の世界を再現してみる。

IV 庶民の息吹—浮立—

近・現代の音楽(芸能)の象徴として、庶民の間に綿々と受け継がれてきた民俗芸能をとり上げる。それは佐賀県内において、一般に「浮立」と呼び慣らわされてきたものである。

五穀豊穡を祈って、或いは感謝して神に奉納されたこれらの芸能は、時代の推移と共にその目的や芸態に変化を生じたものの、一貫して流れるもの、それは庶民の息吹であった。そして、笛・鉦・太鼓の音色は、心を浮き立たせ、次代へつなぐエネルギーとなっていた。

このコーナーでは、特に木・竹製になる最も素朴な楽器、笛・ササラ・鉦太鼓・綾竹に注目し、素朴なるかゆえに多くの種類を持ち得た楽器と、芸能形態との関係について見ていく。

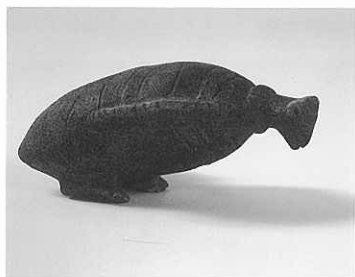
V 世界の楽器—日本の楽器その源流と交流—

日本の楽器の源流や交流について考察を加えるとき、それは海を隔てて世界の楽器に目を向けると面白い。日本の伝統芸能に用いられる(或いは用いられた)楽器を、その形態・構造的な部分で、現在使用される諸民族の楽器と比較し、同系統のものを並べて見ると、不思議とそこに楽器の通った道が見えてくる。特に、中近東地域やインドからの流れは見過せない。

既に、この方面の研究は考古学の成果も含めながら様々な考察がなされ、「絹の道」ならぬ「楽器の道」が示されてきた。

このコーナーでは、I~IVにおいて紹介した楽器を基に、その形態・構造的な部分で類似性の認められる世界の楽器を展示することにより、楽器の持つ世界的な交流を追ってみる。

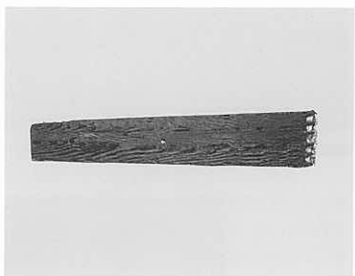
(学芸員 山崎和文)



亀形土製品 (埼玉県指定重要文化財)
縄文時代晩期 埼玉県東北原遺跡 大宮市立博物館



球状笛
現代 チリ 国立音楽大学楽器学資料館



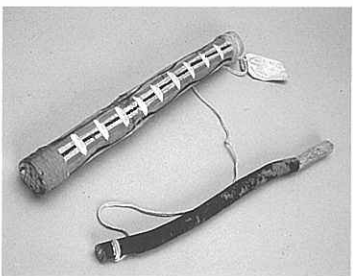
木製琴
弥生時代終末~古墳時代初期 千葉県国府岡遺跡 長生都市文化財センター



イナンガ (琴箏類)
現代 ルワンダ 国立音楽大学楽器学資料館



すりざさら
現代 日本 国立歴史民俗博物館



レコレコ (すりざさら類)
現代 ブラジル 東京芸術大学小泉文夫記念資料室

常設展案内

三岳寺の美術

医王山三岳寺は、佐賀藩祖鍋島直茂、初代藩主勝茂父子により建立された寺院で、小城出身の禅僧であり徳川家康に重く用いられた閑室元信を中興開山とし、臨済宗南禅寺派に属しています。同寺は、学問に秀でていた元信和尚以来の伝統で、一流の学僧を多く輩出し、佐賀の学術・文化に大きな役割を果たしてきました。

また、三岳寺の地は古来より薬師如来の霊場として名高く、かつては三津寺という天台宗寺院であり、鎌倉時代には肥前千葉氏の厚い保護を受けています。

佐賀県立博物館と県下各市町村は、互いに協力して平成四年度から四ヶ年計画で「県内社寺調査」を実施しています。これは佐賀県内の寺院、神社に所蔵される文化財について、その価値を正しく見定め、保存と活用のための基礎を築こうとするものです。

三岳寺に関する調査は平成四年八月に行われ、本尊釈迦如来をはじめとする鎌倉時代の仏像四躯の他、元信和尚に関わるものなど貴重な文化財が多数確認されました。

本展覧会はこの調査の成果をもとにして開催するもので、中・近世を通じて佐賀の領主と深く関わり、文化の中心に位置した三岳寺を取り上げることで、佐賀の歴史と文化の一面を紹介し、優れた肖像画や鎌倉彫刻を親しく鑑賞していただくとするものです。

(学芸員 竹下正博)

出品点数 35件 48点

仏像彫刻 8件 (19点)、絵画 13件
書・古文書 6件、工芸品 8件 (10点)



薬師如来坐像 (鎌倉時代 1294年)



(県重文) 閑室元信像 (桃山時代 1612年説)

常設展案内

日本近代洋画と白馬会

1894年(明治27)10月、前年に帰国した黒田清輝、久米桂一郎により画塾天真道場が開設された。この画塾は山本芳翠の画塾生巧館(1888年設立)を「居抜き」の儘引き継いだもので、「天真道場」の命名は久米の巖父邦武による。

画塾の規定の一に、「当道場に於て絵画を学ぶ者は天真を主とす可き事」とあり、この主張が、のちの白馬会結成時における趣旨の一条「自由を第一義とし」につながる。

白馬会はこうして、1896年(明治29)6月、発会式を挙行、10月7日上野公園旧博覧会5号館で第1回展を開催した。9月には黒田、久米、小代為重、合田清が連名で明治美術会を退会した。会名は当時彼らがしばしば談合した三田聖坂上の濁酒屋にちなみ、濁酒の通称ともなっていた白馬(しろうま)によったとされる。

毎日新聞の記者吉岡芳隆は、白馬会展開催を報じて雀躍として筆を執った。

「廻は上野、時は十月、両者運動の大一挙を見るべし。熱誠の心血を四辺の秋錦に擬へて白馬を展覧会の陣頭に繰出で、紫旗を金風に翻しつ、優然と進むは白馬会なるべく、」

1910年(明治43)の第13回展まで展覧会を開催、いわゆる新派を形成し画壇の主流を占めるに至った。この時期、黒田清輝は、1907年(明治40)の官設展創設にともなう画壇の大同団結を希求し、一方、画家が個人的であることを主張する。



今回の展示は、当館が蒐集の柱とする白馬会の画家の作品である。なお、そのなかで本県出身の白馬会の画家たちに大きな影響を与えた百武兼行(1842~1884)の作品も紹介する。

また、白馬会研究所に学んだ高木背水(1877~1943)の代表作品を今年度購入し、寄託も受けたため、高木背水のコーナーはより充実した展示となった。以下、出品作品を列記する。

百武兼行(1842~1884)	岡田三郎助(1869~1939)
城のある風景 1876	矢調へ 1893
耕作 c.1878	西洋婦人像 1900
バーナード城下絵 c.1878	若き娘の顔 1913
老婦人像 c.1879	花野 1917
マンドリンを持つ少女 1879	薔薇 1931
タンバリンを持つ少女 c.1881	浴衣圖にて 1935
小代為重(1861~1951)	伊豆山 1935
少女 1897	中沢弘光(1874~1964)
シンガポール 1900	奈良風景 戦前
スエズ運河 1900	奈良公園 1920
テムズ河畔 1900	舞妓 c.1955
黒田清輝(1866~1924)	婦人像 c.1957
画室内 1889	高木背水(1877~1943)
小代為重像 1897	緑蔭 1911
久米桂一郎(1866~1934)	英国風景 1911
京都加茂川の景 1893	春雨 1912
子供のいる風景 1894	永田町馬場 大正頃
残睡下絵 1898	婦人肖像 c.1915
藤島武二(1867~1943)	羅馬公園 c.1920
老人像 1907-09	佐賀城壁の門 1936
裸婦 大正代	農家の朝 1941
裸婦 1920年	青木繁(1882~1911)
台湾娘 1933	佐賀風景 1910
蘇洲河激戦の跡 c.1938	朝日 1910

(企画普及係長 松本誠一)

1896年(明治29) 第1回白馬会展覧会場前にて
前列左より小代為重、岡田三郎助、関如来、菊池錦太郎、和田英作、佐野昭、丹羽林平、白瀧魏之助、黒田清輝、今泉秀太郎
後列左より合田幸之助、長尾健吉、中野第三郎、岩村達、久米桂一郎、藤島武二、湯浅一郎、佐久間文吾、合田清、長原孝太郎、小林萬吾

エッセイ

近世の唐津

平成5年7月6日より8月29日の間、博物館常設展の中で、「近世の唐津」をとりあげ、江戸時代の唐津藩に視点を当てた小企画を行い、多くの方に観覧をいただいた。本紙面で、その展示に論及することで報告にかえたい。



「唐津城絵図」(唐津市教育委員会蔵)

そもそも日本史における「近世」という時代区分は、とくにその始まる部分でひじょうに不鮮明なものがある。一説には、統一的な租税の徴取体系が確立される太閤檢地以降であるとする見方があり、そのほかにも封建制度下における兵農・商農分離の基礎が確立される刀狩令以降であるとする見方、江戸幕府の成立以降であるとする見方などがあって、いまだ定説化されたものはない。

そのような中で、豊臣秀吉の朝鮮出兵の舞台となった名護屋城は、それまで打ち続いた戦国の世の終焉であり、まさしく肥前国における中世的世界の残影であったといえる。

しかし、「近世の唐津」というテーマで唐津を語る場合には、近世唐津藩の成立に様々な影響を与えた豊臣秀吉の朝鮮出兵は、やはり、なんとしても避けては通れない事件であろう。

戦国末期ころの上松浦地方は松浦党の中心勢力であった波多三河守親の勢力下にあったが、彼は1592年の文祿の役に出陣した際、「虚病を構え、金海船付に在て終に相戦かはざるの段、前代未聞の臆病者」として秀吉に所領を没収され、常陸国筑波山籠りに流された。

これに代わり上松浦地方を領有したのが、秀吉の側近で尾張出身の寺沢志摩守広高で、1593年彼により唐津藩が創始された。広高はその後、徳川家康と接近して関ヶ原の戦いで肥後天草四万石を領有、また、筑前怡土郡二万石をも加えて12万3000石の大名となった。ここに唐津藩は、譜代大名の支配する領地として新たな出発を見たわけである。

現在、唐津城天守閣の展示場には、同市の鬼塚公民館よりの寄託資料である「寺沢志摩守宛書」がある。これは、意図的な彎曲を加えた袋戸様のものに表装し保存されてきたものだが、その全文を掲げれば、以下の通りである。

「藩口誠示三條

- 一 家中之侍共、家居越飾、又ハ武具の外、私の惠よ□道具を持はやし事、堅令禁制候、衣類



「寺沢志摩守宛書」(唐津市鬼塚公民館蔵)

類□物にもおこりたる儀□□用を本とする者何
(166) □□曲事可申付事、

- 一 私用をかさらず身上相□程人馬をも所持仕儀
 者、何かと(14)其為養置□□□□儀にて無之、
 □□□□□吟味候而、褒美可申付事、
- 一 侍之義理越して奉□、かけひなたを仕、偽か
 さ□を以、主を欺き、身を立んと覚悟し、萬意
 □むさき者あ□□□候へと、内々目付共申渡
 置候、得其旨、常々相嗜可申事、
- 右之趣、家中末々之者迄、可申事、
(1817)
 元和三年八月日

この控書の内容は、家臣らに対して、質素儉約
 を奨励し、主上への忠誠を義務付けたものと理解
 されるが、かつての戦国大名らが定めた分国法と
 の共通性を指摘することもできる。当時、家臣団
 の統制を厳重に行いながら、領内の統治を遂行せ
 ねばならなかった中世から近世への狭間に立つ近
 世大名の姿も見えて取ることができよう。そのよ
 うな意味からも興味を引く資料である。

この寺沢氏が改易になったのち、唐津藩は1年
 間のみ天領となったものの、1649年に大久保
 氏が明石より転封となって以来、松平氏一土井氏
 一水野氏一小笠原氏といずれも譜代大名による支
 配が続くこととなった。

今回のテーマ展示では、佐賀県立図書館や唐津
 市の協力を得て、目新しく、しかも充実した企画
 となるよう試みた。

テーマ展示「近世の唐津」での主たる展示資料
 は、以下の通りである。

「肥前名護屋城図屏風」(佐賀県立博物館蔵)

「豊臣秀吉朱印状」(鍋島報効会蔵)

「豊臣秀吉画像」(東京都 個人蔵)

「波多三河守書状」(北波多村教育委員会蔵)

「寺沢志摩守控書」(唐津市塚原公民館蔵)

「唐津藩領内図」(佐賀県立博物館蔵)

「唐津城絵図」(唐津市教育委員会蔵)

「肥前国産物図考」模本(佐賀県立図書館蔵)より

鯨掛り取りの図	綱網の図
紙漉き大概の図	松浦川 <small>しじみ</small> 取りの図
鶴飼の図	鮎梁の図
馬渡島駒取りの図	海女の図
石炭掘りの図	

「唐津神祭 行列図」(唐津神社蔵)

「小笠原長行書」2点(佐賀県立博物館蔵)

「小笠原長生書」2点(佐賀県立博物館蔵)

「唐津焼」3点(佐賀県立博物館蔵)

(学芸員 川副義教)



「唐津神祭 行列図」部分 唐津神社所蔵

行事案内

1月⇨3月

日月火水木金土

					①	
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29

カレンダー内、□印は休館日

日月火水木金土

	1	2	3	4	5	
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28					

日月火水木金土

	1	2	3	4	5	
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

常設展				展覧会	
観覧料 大人200(150) 大学生150(100) ※高校生以下は無料、()内20名以上団体				枠内に明記する以外は無料	
博物館		美術館		4号展	
1号展	2号展	3号展	大 展	1号AB展	2号展
12/28~1/4 年末・年始休館					
1/8 渡留 自然 り鳥 ほか鳥と 2/6	準 備 1/8 佐賀の歴史 の文教 ほか 2/6	備 1/8 三 の岳 美寺 術 2/13	1/8 竹尾 の 民 ほか 2/13	1/5 風 景 三 根 霞 郷 ・ 池 田 幸 太 郎	1/5 日 本 近 代 洋 白 画 馬 と 会
時代をかなでた楽器 音の結ぶ世界展 2/18(金)~3/27(日) 佐賀県立博物館 大人510(410) 大学生250(150) ※高校生以下および心身障害者は無料				第16回 さが行動展 1/11(水)~1/16(日) さが行動美術	
				第16回 二紀佐賀グループ展 2/8(水)~2/13(日) 二紀佐賀グループ	
				第8回 総合美術ハチロク展 2/16(金)~2/20(日) ハチロク展	
				第38回 佐賀大学教育学部美術・工芸卒業制作展 2/22(水)~2/27(日) 佐賀大学教育学部	
				第10回 佐賀水墨画会展 3/1(水)~3/6(日) 佐賀水墨画会	
				準 備 3/21 平成5年度新収蔵品展3/26~	

日誌

記念講演会

開館10周年記念「日本近代洋画の榮華-岡田三郎助-」展



:10月11日(月)

:美術館ホール

国立西洋美術館長
高階秀爾氏を迎え講演
会を開催。演題は「あ
やめの夢-岡田三郎助
の人物画をめぐって-」
聴講者は487席満席とな
る。

海外調査

- ・宮原香苗(学芸課主査) 10/11~11/6
「世界・森の博覧会」(平成8年度開催)に関わる
展覧会のための陶磁器類の調査および出品依頼。
カナダ、アメリカ合衆国、ブラジル。
- ・蒲原宏行(資料係長) 10/18~10/27
「徐福のふるさと」佐賀県訪中団の一員として、
中国徐福会との交流、「徐福シンポジウム」への
参加および考古関係の資料調査。中華人民共和国
- ・福井尚寿(学芸課主査) 11/9~11/20
「ホノルル美術館名品展」(平成7年度開催予定)
のための所蔵品の調査。アメリカ合衆国(ハワイ)

佐賀県立博物館・美術館報 第104号

平成6年1月5日

編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

〒840 佐賀市内1-15-23 電話0952-24-3947 0952-25-7006

印刷 日之出印刷株式会社